

高齢者・虚弱者の “こころ”と“からだ”に効く漢方

熊本赤十字病院 総合内科・総合診療科
副部長 加島 雅之先生



はじめに

人參養榮湯は、vital energyである“気”と栄養である“血”を補う処方（気血双補剤）であり、疾病や加齢により消耗して栄養状態が悪化し、生体活動が衰えている状態を補充する効果を有している。本講演では、人參養榮湯の特徴と臨床応用について解説する。

気血双補剤の基本と十全大補湯との違い

漢方では、人体は気（生体のエネルギー）、血（血液）および津液（血以外の体液）で構成されていると考えられている。気の不足（気虚）はエネルギーの不足、活動性の低下、冷えなどの症状を呈し、血の不足（血虚）は栄養状態の悪化や皮膚・体毛などの艶が悪くなる、などの症状を呈する。

さらに、気と血の両方が不足した状態が「気血両虚」である。気血両虚は老化の進行としてとらえられることができ、「腎虚」にもつながることからフレイルをはじめとする老年症候群と類似のコンセプトとして認識される。

気血両虚の治療には、気と血の両方を補う気血双補剤が用いられる。気血双補の代表的な処方に人參養榮湯や十全大補湯がある。人參養榮湯は古くから消耗性の病態に幅広く用いられる処方であることが歴史的にも指摘されている。十全大補湯との違いは、十全大補湯に配合される川芎が除かれ、五味子・遠志・陳皮が加味されていることである。そのため、意識の中枢に相当する“心”と呼吸器に相当する“肺”に対して、より効果を発揮する組成となっていることから、心肺機能の強化とともに意欲の改善や抗不安作用などの効果も期待できる（図1）。

補気剤の代表処方である六君子湯や補中益気湯は、消化吸収機能を高めることで体重減少にも効果があるが、それだけでは効果不十分の場合には人參養榮湯を用いる。また人參養榮湯は、消化器症状の出現で十全大補湯の継続服用が困難な場合や、意欲の低下や睡眠障害などの精神症状が合併している場合に推奨できる処方である。

症例 -COPD(73歳、男性)-

耳管開放症の診断にて耳鼻咽喉科から加味帰脾湯を処方され、耳症状は改善していたが、倦怠感、意欲の低下、体重減少が改善しなかったため、人參養榮湯に切り替えた症例である。人參養榮湯の服用開始1ヵ月後には意欲の改善がみられ、体重は増加し、倦怠感も改善した（図2）。

まとめ

人參養榮湯は、フレイルの予防・治療に有用な漢方薬であると考えられる。

図1 人參養榮湯の処方構成

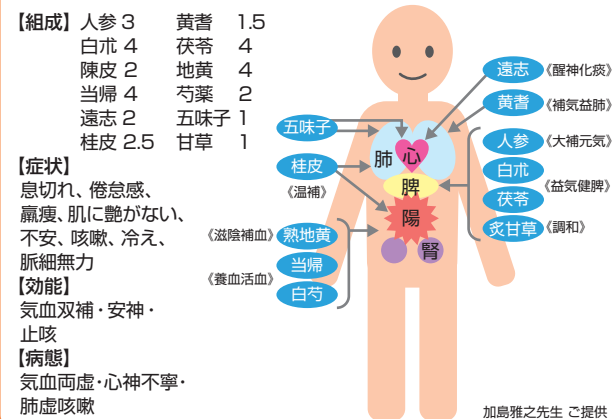


図2 症例 73歳男性

主訴 倦怠感、抑うつ気分、体重減少
現病歴 耳鳴り、聞こえにくさで当院耳鼻科受診、耳管開放症の診断を受けた。体重減少（4kg/3ヵ月）もあり加味帰脾湯が処方され、耳鳴りなどは改善したが、倦怠感、意欲の低下、体重の改善は認められなかった。
既往歴 COPD 耳管開放症 閉塞性動脈硬化症
現症 身長 173cm、体重 52.6kg (BMI 17.57)、1秒率 64%、簡易抑うつ尺度 (QIDS-J): 13 (中等度)
経過 人參養榮湯に変更
1ヵ月後に
● 意欲の改善 QIDS-J: 1
● 体重増加 1.5kg
● 倦怠感の改善



加島雅之先生 提供